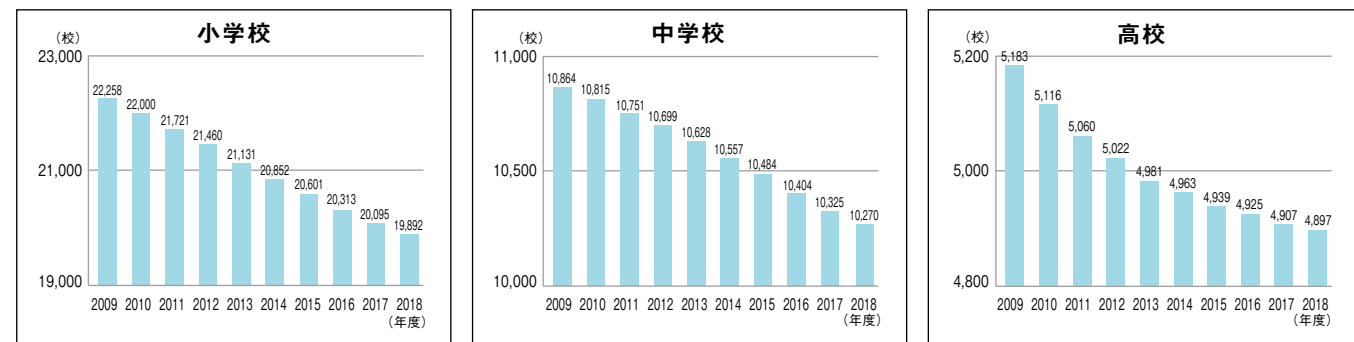
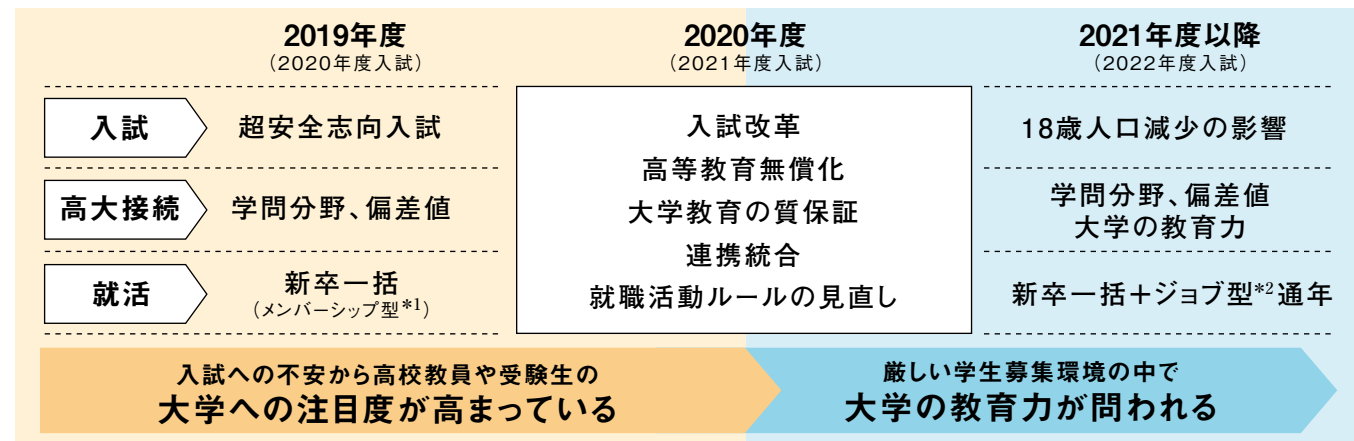


【図表3】この10年で小は2366校、中は594校、高は286校減少



\*文部科学省「文部科学統計要覧」より

【図表4】2020年度を境に、大学を取り巻く環境は大きく変化すると予測



入試への不安から高校教員や受験生の大学への注目度が高まっている。2020年度を境に、大学を取り巻く環境は大きく変化すると予測される。超安全志向入試、学問分野・偏差値、新卒一括型など、従来の入試・接続・就活の枠を超えて、大学教育の質保証や連携統合、就職活動ルールの見直しなどが求められる。また、18歳人口減少の影響や学問分野・偏差値・大学の教育力、新卒一括+ジョブ型通年など、学生募集環境も大きく変化する。

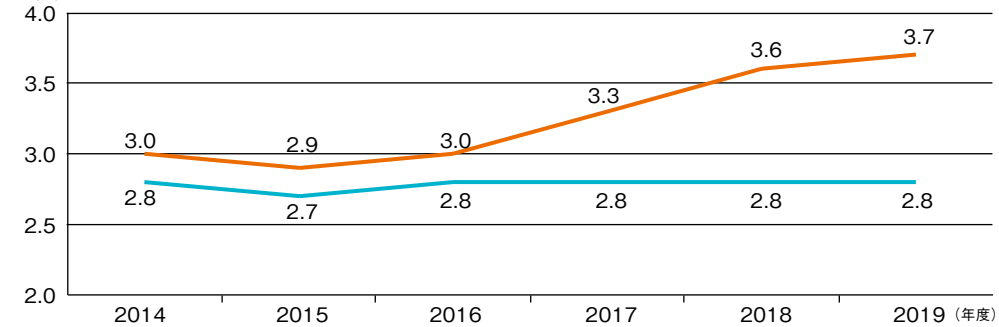
**高校教育改革により 大学を選ぶ基準が変化**  
変わるのは18歳人口だけではなく、高校生の意識も変化してきています。高校では、本年度から新指導要領の先行実施により「総合的な探究の時間」が始まりました。これまでの「総合的な学習の時間」の枠を超えて、教科・科目等の枠を超えて探究的な学習に取り組むことは変わりませんが、テーマ設定のさせ方が変わりました。これまでは自由に設定していたものを、生徒に自分の将来と関連性のあるテーマ

大学を選ぶ基準が変化。従来の「偏差値」だけでなく、「教育力」が、大学を選ぶ基準になるのではないのでしょうか。学生募集市場が厳しさを増し、「教育力」で大学選びが行われるようになる中、大学はどのようなことに取り組むとよいのでしょうか。高校での進路指導の変化から、これからの学生募集の鍵を読み取っていきましょう。

大学の教育力が問われる。2020年度以降、18歳人口減少の影響や学問分野・偏差値・大学の教育力、新卒一括+ジョブ型通年など、学生募集環境も大きく変化する。また、18歳人口減少の影響や学問分野・偏差値・大学の教育力、新卒一括+ジョブ型通年など、学生募集環境も大きく変化する。また、18歳人口減少の影響や学問分野・偏差値・大学の教育力、新卒一括+ジョブ型通年など、学生募集環境も大きく変化する。

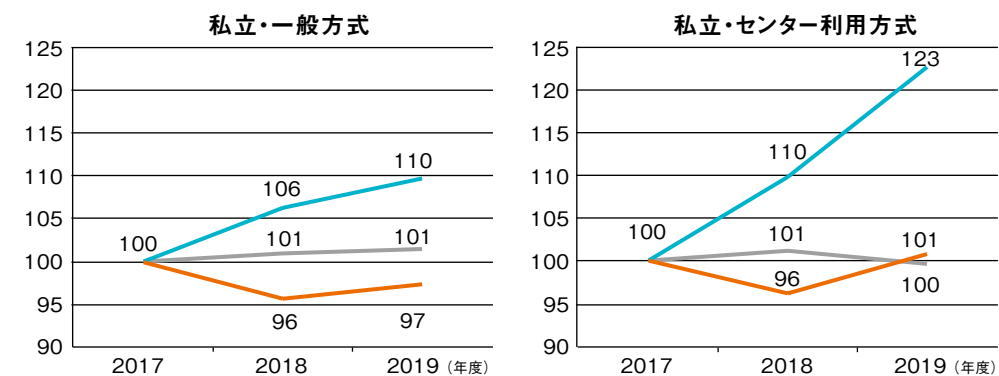
\*1 ポテンシャルを重視した採用 \*2 専門スキルを重視した採用  
\*3 中教審グランドデザイン「18歳人口の減少を踏まえた高等教育機関の規模や地域配置」(2018年11月)より

【図表1】「私大志願者バブル」は2019年度入試も継続  
～一般入試の実質倍率6か年推移



\*実質倍率は受験者数を合格者数で割ったもの  
\*ベネッセコーポレーション調べ

【図表2】志願者数増加が私立大学入試倍率上昇の要因  
～私立大学入試方式別募集人員、志願者数、合格者数3か年推移



\*2017年度の人数を100とした指数の推移  
\*ベネッセコーポレーション調べ

**大学の生き残り競争が 現実味を増してくる**  
高大接続の領域では今、入試改革や高等教育無償化、大学教育の質保証など、2020年度を節目とするさまざまな改革が進んでいます。そのため2020年度を境に、大学を取り巻く環境が大きく変化すると予測されます。まずは入試について。現在は、入学定員管理厳格化(以下、入定厳格化)の影響により、「私立大学入試での実質倍率の上昇」が続いています。国立大学の実質倍率は、この6年間ほとんど変化していないのに対して、私立大学の実質倍率は、2016年度入試から4年連続で上昇しています。これは、入定厳格化による

大学の生き残り競争が現実味を増してくる。2020年度を境に、大学を取り巻く環境が大きく変化すると予測されます。まずは入試について。現在は、入学定員管理厳格化(以下、入定厳格化)の影響により、「私立大学入試での実質倍率の上昇」が続いています。国立大学の実質倍率は、この6年間ほとんど変化していないのに対して、私立大学の実質倍率は、2016年度入試から4年連続で上昇しています。これは、入定厳格化による

# ポスト2020年に求められる学修成果の可視化とその活用

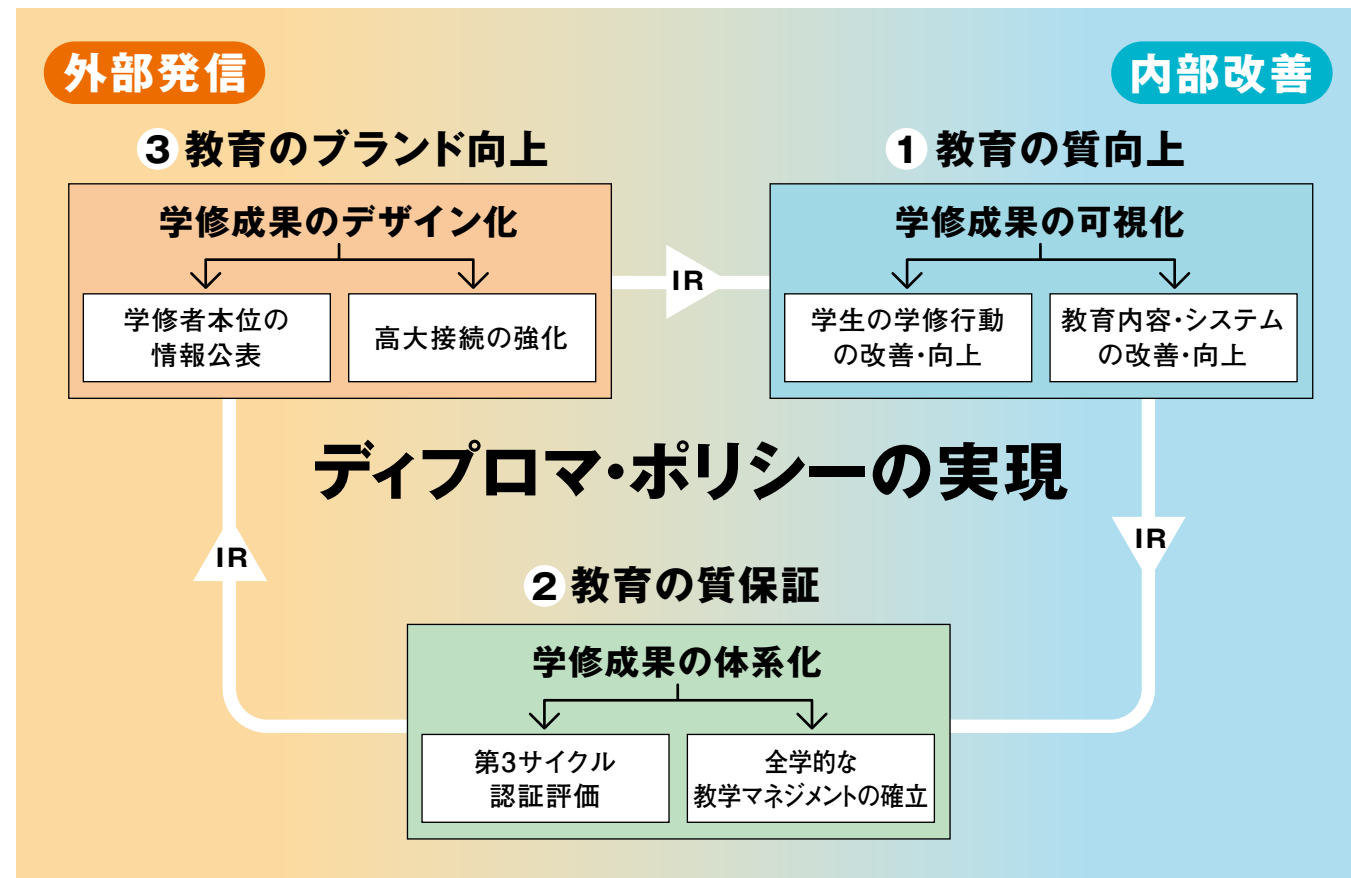
問題提起

## 2020年度以降の学生募集市場の変化



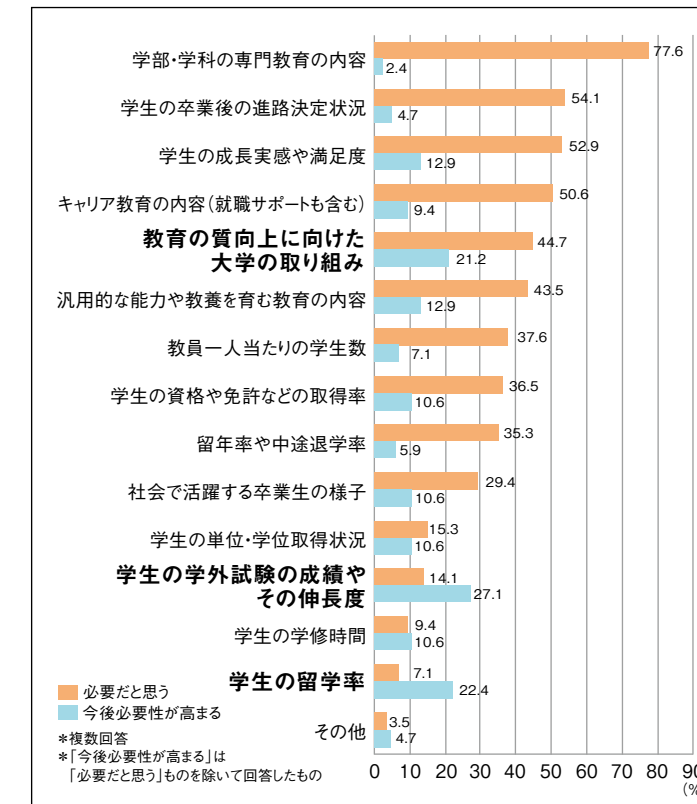
(株)進研アド Between 編集長  
**中村浩二**  
なかもらこうじ ●1990年(株)福武書店(現ベネッセコーポレーション)に入社。高校事業部にて高校の教育改革支援に携わった後、(株)進研アド九州支社勤務を経て現職。

【図表7】全学で学修成果を利活用して、ディプロマ・ポリシーの実現度を高める

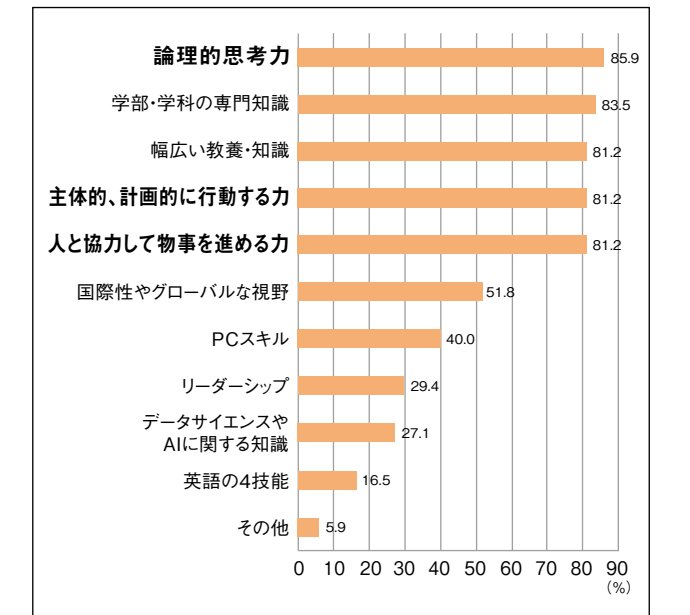


高校教員に聞いた大学の教育力調査結果

【図表6】今後は教育の質を示すエビデンスに注目  
～進路指導を行ううえで必要な大学の教育に関する情報



【図表5】大学に汎用的能力の育成を期待  
～大学生が卒業するまでに身に付けるべき能力・姿勢



**学修成果の利活用により  
ディプロマ・ポリシーの実現度を高める**

**可視化した学修成果と  
教育の質を外部に発信**

多くの大学では今、「学修成果の可視化」に取り組んでいます。高等教育の成果を可視化することは容易ではないため、可視化するだけで手いっぱいとなり、その先の活用になかなか進めない大学が多いようです。しかし、前述のように、今後教育の質に関する情報が学生募集に大きく影響を与えることを考えると、可視化した学修成果を教育改善だけでなく、さまざまな部署で利活用すべきです。全学での学修成果の利活用については、【図表7】のようなサイクルで考えるとよいでしょう。

まずは、①教育の質向上です。ここでは学修成果を可視化し、学生の学修行動や、教育内容・システムの改善・向上に取り組むPDCAサイクルを確立します。現場でのこの活動が、全ての取り組みのベースです。学生の成長が見えることは、改善・向上に取り組む教職員にとって活力にもなります。次に、②教育の質保証です。可

視化した学修成果を全学の教育目標であるディプロマ・ポリシー(DP)の実現につながるように体系化します。それにより教員は全体の中で自分の役割が理解でき、授業改善の方向性がより明確になります。なお認証評価では、個々の教員の教育改善に向けた努力が大学として積み上がる形になっているかがチェックされます。

最後は、③教育のブランド向上です。可視化した体系化した学修成果を、学生を主語にした「成長ストーリー」にデザインし直して広報します。なぜなら、高校生や保護者、高校教員などが知りたいのは、「どういった入学者が、どういった教育を受けて、どう成長し、社会でどう活躍しているか」という学修者目線での情報だからです。また、自学の教育に期待する入学者が増えれば、教育の質向上と学生募集の好循環が期待できます。

これら3つをつなぐのがIRの役割です。このサイクルによりDPの実現度を高めることが、今後大学が生き残るための重要な戦略の鍵となるでしょう。

**高校教員が大学に期待する  
学修成果の可視化とは**

**進路指導は受験指導から  
キャリア教育へ**

さて、進路選択に大きな影響を与える高校教員は今、大学の何をみて高校生の進路指導にあたっていいのか。アンケート結果を基に考察していきます。

高校教員が期待する大学の教育を「大学生が卒業するまでに身に付けるべき能力・姿勢」という問いで聞いたところ【図表5】、専門知識や教養を抑えて、一番高かったのが、「論理的思考力」という結果でした。また、「主体性」や「協働性」の育成も、教養と同程度期待していることがわかります。これらは高校教育で育成している学力の3要素と重なっており、高校教員は高校で育成した力を大学でさらに発展させたいと考えていると言っています。

では、こうした期待にどう応えられる大学をどう探すのか。高校教員が進路指導で必要としている大学の教育情報を、「今必要」なもの、「今後必要性が高まる」ものに分けて聞いてみました【図表6】。

このように高校の進路指導は、その目的が、「志望大学への合格」から、「社会で活躍するために必要な力の育成」つまり、「受験指導」から「キャリア教育」へと変わってきていると言えます。その意味で、「学修成果の可視化」とその「情報公表」は、大学にとって喫緊の課題なのです。

6。これによると今は、専門教育の内容が一番必要とされていますが、今後必要性が高まる情報としては、「学生の学外試験の成績やその伸長度」や、「教育の質向上に向けた取り組み」、「学生の留学率」などがめだつて高くなっています。つまり、教育の質に関する情報やそれを示すエビデンスに注目が集まっているのです。

実際、フリーアンサーでは、「大学をゴールにするのではなく、社会人育成としての指導が重要」「偏差値で当てはめるのではなく生徒の目標や能力と大学のマッチングを最大限考慮した進路指導が必要」「生きる力を伸ばす意味でのキャリア教育を充実させたい」との声が挙がっていました。